

| | | | | | | | | |
|---|------------|---------------------------------|------|----|-----|------|-----|----|
| 1 | 2023.06.01 | [情報偏食 ゆがむ認知] (3) 動画拡散 いじめ加速 その1 | 東京朝刊 | 一面 | 01頁 | 792字 | 03段 | 写真 |
|---|------------|---------------------------------|------|----|-----|------|-----|----|

選択部分をキーワードとして： を検索

選択部分を辞書で検索： から検索

 この記事を英文で読む

◇第3部 揺れる教育現場

中学3年だった昨秋。東日本に住む高校1年の男子生徒（15）が異変に気づいたのは、仲良しの女子生徒の一言がきっかけだった。「変な動画が回っているけど、大丈夫？」

他人に見られたら恥ずかしい自身の性的な動画。同級生にスマートフォンで撮影されたものが、通っていた私立中から貸与されたタブレット型端末「iPad（アイパッド）」で共有されたというのだ。

「異性の友達にまで見られてしまった」と追い詰められた男子生徒。昨年末、遺書のつもりでスマホにこう打ち込んだ。「14年間、育ててくれてありがとう」

嫌がらせが始まったのは中2の頃だった。蹴られたり、物を隠されたり。中学で使うアイパッドのチャットでは、知らぬ間に、自分の名字を入れた「撲滅委員会」と題するグループも作られていた。

SNSで自分と同じような考えの人に囲まれるうちに過激な言動につながる「エコーチェンバー（反響室）」という現象。限られたメンバーで行動する子どもの間では、特に起きやすいとされる。



◇第3部 揺れる教育現場

中学3年だった昨秋。東日本に住む高校1年の男子生徒（15）が異変に気づいたのは、仲良しの女子生徒の一言がきっかけだった。「変な動画が回っているけど、大丈夫？」

他人に見られたら恥ずかしい自身の性的な動画。同級生にスマートフォンで撮影されたものが、通っていた私立中から貸与されたタブレット型端末「iPad（アイパッド）」で共有されたというのだ。

「異性の友達にまで見られてしまった」と追い詰められた男子生徒。昨年末、遺書のつもりでスマホにこう打ち込んだ。「14年間、育ててくれてありがとう」

嫌がらせが始まったのは中2の頃だった。蹴られたり、物を隠されたり。中学で使うアイパッドのチャットでは、知らぬ間に、自分の名字を入れた「撲滅委員会」と題するグループも作られていた。

SNSで自分と同じような考えの人に囲まれるうちに過激な言動につながる「エコーチェンバー（反響室）」という現象。限られたメンバーで行動する子どもの間では、特に起きやすいとされる。

ネットでの嫌がらせはアイパッドにとどまらなかった。動画は、生徒個人のLINE（ライン）で、中1の時のクラスメートや、自分が所属していない部活のメンバーたちにも回された。〈い〇めとか笑わせんな〉〈はよ失（う）せろ〉。自身のインスタグラムには今年2月、匿名のメッセージが届いた。

学校側は昨秋、動画が少なくとも十数人に拡散したことを確認。関係した生徒らを呼び出して消去するよう指導した。「できる限りのことをしたが、スマホの中身まで全てチェックできない」とする。

「一度、出回った動画は消せない」と嘆く男子生徒。「将来、『動画を持っているぞ』と脅されないか」。底知れぬ不安に、今もおびえている。〈27面に続く〉

写真＝動画の拡散に今も悩む高校1年の男子生徒。「顔の見えない誰かに今でも笑いものにされているかと思うと心が休まらない」と話す

| | | | | | | | | |
|---|------------|---------------------------------|------|----|-----|-------|-----|------|
| 1 | 2023.06.01 | [情報偏食 ゆがむ認知] (3) 女子の顔「醜く」編集 その2 | 東京朝刊 | 社会 | 27頁 | 2364字 | 06段 | 写真・図 |
|---|------------|---------------------------------|------|----|-----|-------|-----|------|

選択部分をキーワードとして: を検索

選択部分を辞書で検索: から検索

(1面の続き)

◇第3部 揺れる教育現場

◆字幕で中傷 閲覧数百回

快活だった女子生徒が、突如としてバスケットボール部に来なくなったのは昨年9月上旬だった。関東地方の公立中で、レギュラーの座をつかみつつあった当時中学2年の女子生徒。副顧問の男性教員(42)が何人かの部員に事情を尋ねたところ、一人が明かした。「女子生徒を撮った動画の加工が原因だと思います」

昨年7月末、他校との練習試合。レギュラー争いをしていた3年生が「今後の参考に」と言って、女子生徒のプレー姿をスマートフォンで撮影した。

問題の動画を見た男性教員は「えっ」と目を見開いた。相手の守備をかわしてドリブルしたり、パスを防ごうと両腕を大きく広げたりする動き。瞬間的に白目になったり、つばが飛んだり、表情が「醜く」見えるシーンがつなぎ合わされ、30秒ほどに編集されていた。



◇第3部 揺れる教育現場

◆字幕で中傷 閲覧数百回

快活だった女子生徒が、突如としてバスケットボール部に来なくなったのは昨年9月上旬だった。関東地方の公立中で、レギュラーの座をつかみつつあった当時中学2年の女子生徒。副顧問の男性教員(42)が何人かの部員に事情を尋ねたところ、一人が明かした。「女子生徒を撮った動画の加工が原因だと思います」

昨年7月末、他校との練習試合。レギュラー争いをしていた3年生が「今後の参考に」と言って、女子生徒のプレー姿をスマートフォンで撮影した。

問題の動画を見た男性教員は「えっ」と目を見開いた。相手の守備をかわしてドリブルしたり、パスを防ごうと両腕を大きく広げたりする動き。瞬間的に白目になったり、つばが飛んだり、表情が「醜く」見えるシーンがつなぎ合わされ、30秒ほどに編集されていた。

〈顔やば〉〈ゴリラみたい〉。中傷する字幕がつけられ、3年生の部員のLINE(ライン)で共有。外部の人でも見られる動画共有アプリにも投稿され、閲覧数は数百回に上った。

男性教員が、撮影した3年生に事情を聞くと、別の部員からこう聞いたという。「うまい子だからこそ、変な動きや顔がおもしろいよね」「有名なアスリートの“コラ画像”はネットによくあるし、問題ないよ」

コラージュ画像—。顔写真を切り貼りして組み合わせたもので、中には、著名人らの顔写真を面白おかしく加工したものがネット上で多数みられる。撮った3年生は「いじめだと思わなかった」と弁解したが、男性教員は動画を消去させ、女子生徒に謝罪させた。

男性教員は「SNSでのいじめは見えにくく、スピードも速くて対応が難しい」と話す。

◎

パソコンやスマホを使った小中高校などでのいじめは近年、急増している。文部科学省によると、2021年度は2万1900件に上り、統計を取り始めた06年度の約4・5倍に上った。

兵庫県立大の竹内和雄教授(生徒指導論)は、増加の背景に、コロナ禍で学校での対面や会話が減ったことに加え、ネット空間で同じような考えの人たちの意見が反響し合う「エコーチェンバー(反響室)」もあるとみる。

竹内教授は「子どもたちは大人に比べて交友関係が狭い。閉ざされたSNS上でやり取りするうちに自分たちの考えが正しいと思い込み、いじめがエスカレートしやすい」と分析。「新しいアプリが次々に登場し、低年齢化が進んで手口も巧妙化しており大人が気づきにくくなっている」と話す。

◎

「まさか私の写真まで勝手に拡散されるとは思いもしなかった」。中2の長男（13）が複数の同級生からいじめを受けた30歳代の母親はそう話す。

いじめの始まりは、長男が関西地方の中学校に入学した昨春だった。同級生から丸刈りにするよう言われ、仲間内で一人だけ拒否すると、「こいつとは仲良くするな」と仲間外れにされた。

長男のSNSには、別の同級生から、「ころすぞ」などと書き込まれた。昨秋から別室での授業を余儀なくされても、「全部お前が悪い」などと追い打ちをかけてきた。

同じ頃、嫌がらせの矛先は母親にも向けられた。

「知り合いからこんな画像が送られてきた」。長男からスマホを見せられた母親は、不自然に拡大された自分自身の顔写真が目に入った。ラインに以前、載せていた家族写真。母親の顔だけが切り取られていた。

長男の同級生を問いただすと、オンライン上のゲーム仲間を送りつけたことを認めた。母親の知らないところでネット空間を巡り、長男のスマホに回ってきた写真。母親は「どこの誰だか分からない人に見られたかと思うと、気味が悪かった」と振り返る。

母親によると、この同級生は長男と同じ小学校に通っていた時、友達の顔写真を「遺影」のように無断で加工したこともあるという。母親は「止める人が誰もいなくて、SNSでは何をやってもいいとエスカレートさせている」と憤る。

2年生になってクラスが替わり、ようやく元の学校生活を取り戻しつつある長男。母親は長男へのいじめについて学校に相談してきたが、「個人のスマホのことには対応できない」と取り合ってもらえなかったという。「SNSのいじめが過激になって親にまで及んでいるのに、学校の当事者意識はあまりに低い。またいじめられても守ってくれないのか」。母親の不信と不安は強い。

◆「いいね」で罪悪感薄く いじめ「承認」錯覚

SNSでは、いじめが深刻化しやすいとされる。社会心理学者の綿村英一郎・大阪大准教授によると、「SNSいじめ」の大きな特徴は、いじめる側が罪悪感を感じにくい点だという。

SNSに限らず、いじめは「被害者への共感や同情」、「深刻度の認識」があれば起きにくいことが、心理学の実験で実証されている。

ところが、SNSでは相手が苦しむ様子を目の前で見ないことが多い。「投稿者」「拡散者」など役割が多岐にわたり、一人ひとりの加担の度合いが小さくなりがちだ。相手の何げない発言をネガティブに捉えて敵対視する「敵意帰属バイアス」にも陥りがちという。

いじめる側の投稿の内容を深く考えず、習慣的に「いいね」ボタンを押す人もいる。その結果、いじめる側は自身の行為が周囲から「承認」されたと錯覚し、行為がエスカレートする。同じメンバーでいじめが繰り返されれば、同調圧力が高まり、行為をやめるような指摘をしづらくなる。

いじめを認識しながら何も反応しない「傍観者」の存在も問題だ。綿村准教授は「惰性で『いいね』を押さないことはもちろん、メンバー同士で『良くないよね』と声を掛け合うことが大切だ」と強調する。

図＝小中高校などでパソコンやスマートフォンを使ったいじめの認知件数

図＝SNSでエスカレートするいじめのイメージ

図＝いじめにブレーキをかける心理学的要因

写真＝中2の長男のSNSに送られてきたメッセージ